

## 周手術期実習に関する看護研究の動向

武内 和子<sup>1)</sup> 牛尾 陽子<sup>1)</sup> 平井 孝次郎<sup>1)</sup> 岩瀬 和恵<sup>1)</sup>

### 要 旨

【目的】 臨床現場に即した周手術期実習プログラムを検討する基礎資料として、国内先行研究の動向を探索し、教育方法の課題と展望を明らかにする。

【方法】 医学中央雑誌Web版を用い、「周手術期実習」「原著論文」で全年検索を行い、対象論文を構成する主要項目をデータとして、量的及び質的に分析し、考察した。

【結果】及び【考察】 対象文献29件。研究細目分類では「教授方略」12件、「学生理解」11件、「看護技術教育」4件、「授業設計」2件で、2015年以降「学生理解」が最も多く、新たに「授業設計」がみられはじめた。患者の在院日数が短縮化する臨床現場に対応することが課題であるが、看護を具体的にイメージして実習に臨む事前学習の有効性が「教授方略」「学生理解」「看護技術教育」の多側面から裏づけられた。また、事前学習は学生間の学力格差という現代的な学力の課題への対応として重要であることが示唆された。

キーワード：周手術期実習 看護教育 文献検討

### I. 緒言

周手術期実習は、手術を受ける人の身体と心を理解し、各経過時期に応じた生命維持・健康回復への看護を実践するために必要な能力を習得することを目的としている。周手術期実習の特徴として、手術という生体への侵襲を伴う治療法による患者の様々な面に生じる急激な変化があり、学生は短期間のうちに知識確認を行い、患者の状態と照合し、安全安楽を保証した看護援助を実践することの必要性があげられる。学生にとって、初めて体験する多くの医療機器や特殊環境下における学習であり、学生は周手術期実習に強い困難感や不安を感じているという報告が数多い<sup>1) 2) 3) 4) 5)</sup>。

近年、医療技術の進歩に伴い、低侵襲性手術が増加して早期の退院が可能となり、患者の在院日数の短縮化が進んでいる。周手術期実習への影響も少なくなく、受け持ち患者が手術後の早期に退院し、学生の看護過程の展開が後追いになることもしばしばである。在院日数が短い患者と学生の出会いの場面を、いかに有効に授業設計していくかが教員に求め

られている。2011年、厚生労働省『看護教育の内容と方法に関する検討会報告書』<sup>6)</sup>では、在院日数の短縮化が進む臨地実習の現状を踏まえ、臨地実習で経験できない内容は学内での演習で補完すること、実習の事前準備や実習中あるいは実習後の振り返りを充実させること、看護実践の場以外で行う学習も臨地実習に含めることなど、医療現場の状況にあわせ、臨地と学内の学習が連動する教育プログラムの推進が提案された。そして、2019年10月15日、厚生労働省は『看護基礎教育検討会報告書』<sup>7)</sup>として、「保健師助産師看護師学校養成所指定規則」の改正案などを発表し、領域横断の考え方に基づく実習の実現化に向けて動き出した。今後、教育実践レベルでの具体的な実習プログラムの設計が周手術期実習を含む看護教育において大きな課題になっている。

### II. 研究目的

本研究は、患者の在院日数の短縮化など臨床現場の現状に即した周手術期実習プログラムを検討する基礎資料として、周手術期実習に関する国内先行研究の動向を探索し、教育方法の課題と展望を明らかにすることを目的とした。

1) 川崎市立看護短期大学

### Ⅲ.方法

#### 1.文献の抽出方法と文献数

文献は医学中央雑誌Web版を用いて検索を行った。対象とする文献は文献レビューの先行研究から研究件数が少ないことが想定されたため、1983～2018年の全年検索とした。キーワードを「周手術期実習」とし、タイトルまたは抄録に含むものを対象とした。対象や方法、結果の詳細が記述されている必要があるため、対象文献の論文種類を会議録(抄録)や解説を除く「原著論文」に絞ったところ、ヒットした文献は30件だった。これら30件のうち、①対象者が学生もしくは看護師と患者もしくは家族ではないもの(1件)、②文献レビュー(0)を除くと29件になった。次に論文内容の質を評価する条件として、方法が再現可能なプロセスで明示されていることを確認し、最終的に29件で分析を行うことにした。

#### 2.分析方法

分析方法の手順は、大木<sup>8)</sup>によるシステムティックな(系統的な)方法の「文献レビューのプロセス」を参考にした。今回、周手術期看護領域の研究の動向そのものを探索する目的から、妥当性の確保が行われているかなどの研究の質を厳密に評価せず、選定した文献はすべて分析対象とした。文献の分析項目は、論文構成の主要項目である発行年、目的、対象者、調査法、調査結果とし、独自に文献レビュー用紙を作成して文献ごとに整理し、調査結果を要約、抜粋して、記述内容で分類し、文献数の統計を行った。記述統計の結果をさらに短文化して、文献の全体像を一覧する要約表を作成した。次に、分析項目のうち、目的、調査結果の内容から、その研究は「どのような研究細目であるか」の視点で分類し、件数を算出した。研究細目の分類は、日本看護学教育学会学術集会で用いられる演題の分類<sup>9)</sup>を参考にした。日本看護学教育学会の演題の分類は、「学生理解」「授業設計」「教授方略」「教育評価」「臨地実習」「看護技術教育」「倫理教育」「医療安全教育」「カリキュラム」「新人教育」「継続教育・教育プログラム」「教員の資質・能力」「キャリア開発」の13分類からなるが、本研究のテーマは看護基礎教育の周手術期実習に絞られるため、「臨地実習」「新人教育」を除き、「継続教育・教育プログラム」は「教育プログラム」に変更して、11分類で行った。なお、「授業設計」は授業

の構成に関すること、「教授方略」は授業の方法、手順に関することとして分類している。

本研究は、発行年、目的、対象者における連結不可能匿名化された既存資料のみを用いる研究であることから、研究倫理審査委員会等の承認が不要な研究であると判断しているが、研究倫理に関わる配慮として、文献を抽出する際は、対象文献に偏りがないようにWebソフトを使用し、キーワードを入力して自動的に検索を行い、論文作成の際に使用した文献は本文中に引用したことを明記して対象文献の概要を表1として記載し、対象文献、引用文献の一覧はリストとして最終ページに記載した。

### Ⅳ.結果

#### 1.対象文献数および文献数の経時的変化

抽出した文献は29件であり<sup>10)~38)</sup>、すべての文献を入手して精読したところ、選定した文献のすべてで論文としての構成が整っていた。分析対象となった文献の記述内容を要約、抜粋し、日本看護学教育学会の演題の分類を活用して分類し、分類一覧として、表1(1)、表1(2)を作成した。周手術期実習をテーマとした文献は2002年から発行がみられはじめた。発行件数の経時的変化の把握として、2001年から2018年の18年間で6年ごとで3分割して換算すると、2001年から2006年が7件、2007年から2012年が10件、2013年から2018年が12件であり(図1)、文献数の増加傾向がみとめられた。各年を比較すると、2017年が5件で最も多かった(表1)。

図1 周手術期実習に関する看護研究の研究細目別文献数の経時的変化

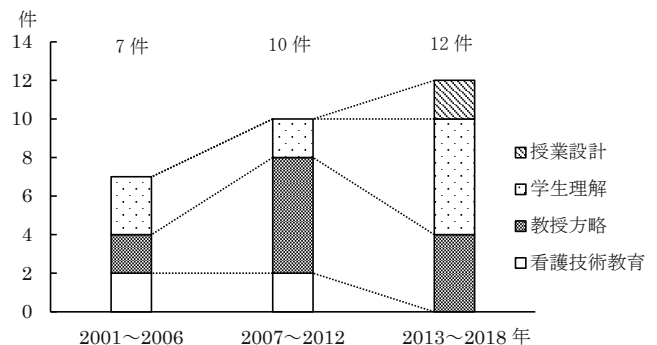


表 1 周手術期実習に関する看護研究の概要 (1)

引用文献 No.	著者名	発行年	目的	対象者	調査法	調査結果(要約、抜粋)	研究細目の分類
10	猪俣祥子、他	2002	周手術期実習におけるカンフアレックスの回数と学生の知識の習得度の関係を明らかにする	短期大学看護学科 3 年生 40 名	質問紙調査	カンフアレックスの回数と正解率に相関が認められた。カンフアレックスは知識の習得に影響を与えているが、内容や実施方法も重要であることが示唆された。	教授方略①
11	北川さなえ	2003	周手術期実習に対する看護学生のイメージを、高校卒業の学生、就職経験のある学生で比較する	看護専門学校 3 年生 28 名	質問紙調査	周手術期実習における看護学生のイメージを高校卒業の学生、就職経験のある学生間で比較する	学生理解①
12	桑子喜美	2003	周手術期実習の課題レポートから教授活動を明らかにする	短期大学看護学科 科 82 名	実習レポートの内容分析	周手術期実習の課題レポートから教授活動を明らかにする	教授方略②
13	吉井美穂、他	2004	実習前後の学生の手術に対するイメージの変化を明らかにする	大学看護学科 4 年生 60 名	質問紙調査	SD 法 (形答例 23 対) によるイメージ調査の結果、「嫌い」から「好き」、「親しみにくい」から「親しみやすい」、「暗い」から「明るい」、「型にはまった」から「柔軟な」などの 9 項目で、肯定的なイメージへの有意な変化がみられた。	学生理解②
14	神野良枝、他	2005	周手術期実習における学生のストレス認知と生理的反応の関連を明らかにする	看護短期大学 3 年生 10 名	STAI 調査 唾液中クロモグラーニン A 測定	STAI は、ケア直前に高く、その後も高いレベルを維持しながら、経時的に低下する傾向がみられた。唾液中クロモグラーニン A は、ケア前後の顕著な上昇はみられなかった。	学生理解③
15	加藤千恵子、他	2005	周手術期実習で行った筋肉内注射に対する学生の自己評価を明らかにする	短期大学看護学科 科 80 名	質問紙調査	筋肉内注射に関する【準備】【実施】【後片づけ】の 3 カテゴリー、計 15 項目で調査した結果、【実施】よりも【準備】の自己評価が低く、項目別では「注射部位の消毒」「手洗い」の自己評価が高く、「手術薬液を吸う」「後始末」の自己評価が低かった。	看護技術教育①
16	阪井幸恵、他	2006	術後患者の包帯交換場面における学生の観察内容を明らかにする	大学看護学科 4 名	実習レポートの内容分析	学生は手術前、患者の自覚症状、医者の行為など、包帯交換の状況を広く観察できていた。今後は、観察ポイントの理解、観察結果の言語的な記述への指導を強化する必要がある。	看護技術教育②
17	森一恵、他	2007	新人看護師が看護基礎教育の周手術期実習に求める学習内容を明らかにする	卒業 1 年以内の看護師 16 名	半構成的面接	新人看護師は実習と臨床実践の違いで【判断を求められる】【専門的な知識を求められる】などを感じ、実習の学習内容に【アセスメントの知識】【回復過程を予測するための知識】【アセスメントの技術】【実践で用いる技術】を求め、【疑問をもち、解決する姿勢が必要】と感じた。	教授方略③
18	杉山恵子、他	2008	周手術期実習で学生が「患者の状態をとり返して看護援助できた」と評価した場面を振り返り、学びを支える要素を明らかにする	看護専門学校 3 年生 5 名	質問紙調査後に半構成的面接	援助の実施前は【患者の背景】【手術に対する思い】などの情報収集を行い、実施中は【わかりやすい言葉】【知識・技術の提供】などで関わり、実施後は【看護収集】【患者からの承認】【患者の肯定的な反応】などから【できた自分を認める】などがみられた。	学生理解④
19	原元子	2009	手術室実習において見学実習から学生参加型実習へ変更したことによる学生の学びを明らかにする	看護大学 4 年生 58 名	実習レポートの KJ 法による分析	学生の学びで【臨床指導者の対応と学生の心の揺らぎ】【看護師は体力勝負】【手術室での看護の専門性についての学び】が関係し【体験を通しての学びは楽しい】に繋がることなどが捉えられた。学生と指導者が学習目標を共有することで学生の自己効力感が高まっていた。	教授方略④
20	佐野なつめ	2009	学生が行った術後観察(バイタルサイン・チューブ類・手術創・疼痛・腹部状態)の状態を明らかにする	看護専門学校 3 年生 12 名	実習記録の分析	バイタルサインの観察は手術当日・術後 1 日目ではほぼ全員が行い、術後 2・3 日目で観察数が少なくなっていた。チューブ類では排液の性状の観察数が少なく、手術創・疼痛は全員がほぼ毎日観察し、腹部状態は術後 3 日目まで観察していた。	看護技術教育③
21	原田真里子、他	2009	学生の看護技術の実施・習得状況から、慢性期実習、周手術期実習の特徴を明らかにする	大学看護学部 1 年生 50 名	看護技術チェックリストの分析	各看護技術の実施率は全体的に低かった。講義内容から実施・習得が望ましいと考えられた技術の多くは実施率 50% 以下だった。だが、実施した技術の習得率は高く、看護技術チェックリストを講義から種々重ねて使用できる様式へ変更するなどの検討が必要と考えられた。	看護技術教育④
22	山本多香子	2010	術後ケアにアロマセラピーを取り入れたことによる、学生と患者の関わり、学生の心理的な変化を明らかにする	看護短期大学 9 名	半構成的面接	アロマセラピーの取り入れ前は【行きつらさ】【現状の打開】【ケアへの関心】の 3 段階がみられ、取り入れ後は【効果の実感】【和らいだ空間の実感】【ケアする喜びの実感】の変化がみられた。	教授方略⑤
23	山本多香子、他	2010	運動器疾患患者に関する周手術期実習の事前学習会を行い、看護計画立案・実践への効果、今後の改善点を明らかにする	看護短期大学 3 年生 26 名	質問紙調査	実習前に禁忌症は、術後回復過程をイメージすることができ、実習中の患者に応じた看護計画立案や援助につなげられた。今後は、患者の思い、日常生活が制限される患者体験を取り入れた学習が必要である。	教授方略⑥
24	佐野なつめ	2011	周手術期実習における M. Gordon「健康知覚 - 健康管理パターン」の情報収集の現状を明らかにする	看護専門学校 2、3 年生 17 名	実習記録の分析	学生は患者の言語表現から健康、病状などの情報、患者への質問から対象の特性や知覚的・情緒的なレイアウトの情報を得ていたが、対象が学習する必要がある知識と行動、対象の学習ニーズの情報は少なかった。患者教育に関する情報収集、初期アセスメントへの支援が必要である。	教授方略⑦

表 1 周手術期実習に関する看護研究の概要 (2)

引用文献 No.	著者名	発行年	対象者	調査法	調査結果(要約、抜粋)	研究細目の分類
25	山本多香子、他	2011	看護短期大学 3年生 26名 大学看護学科 3年生 40名	演習レポートの 内容分析 質問紙調査	演習レポートの分析結果から質問紙を作成し実習後に実施した。【作成上の留意点】で「文章表現方法」など、【個別性に応じたいための留意点】で「退院後の生活で知りたいと思うこと」となどの情報提供、【視覚的な効果を狙う】で「絵や写真を入れる」などが述べられた。	教授方略⑧
26	水谷郷美、他	2011	大学看護学科 3年生 40名 実習指導看護師 28名	質問紙調査	達成感に関する要因として、学生は「看護師協力度評価」「目標達成度」「実習時間」「実施した看護援助」「看護援助」「指導時間」があげられた。	学生理解⑤
27	長田艶子	2013	大学看護学科 3年生 58名	質問紙調査	シャドールーの実施率は全体の 62.1%で、実施した学生は術後 1 日目が多く、看護への効果として「役に立った」「少し役に立った」が 60%以上、必要であるが 91.7%であった。患者を継続して受け持たない場合、シャドールーが有用であることが示唆された。	教授方略⑨
28	廣松美和	2013	看護専門学校 3年生 20名	実習記録の内容 分析	援助関係の形成に関する 6 要因が抽出され、「関心をよせる」「推し量る」「照合する」は思考、感情、行動の相互作用を伴う形成要因、「応える」は感情や思考が伴わず消極的な形成要因、「委ねる」「信頼する」は思考・感情・行動が伴わず形成要因ではないと考えられた。	学生理解⑥
29	菱刈美和子、他	2015	短期大学看護学科 3年生 86名	質問紙調査	受け持ち患者とは別に ICU・HCU 実習を半日行った。体験群 73 名と体験なし群 13 名を比較した結果、看護実践力は体験群が優位に高かった。体験群のうち、看護実践力の変化量が大きい上位 25%の学生は、既習した知識や技術をうまく活用して日常生活の援助を実施していた。	授業設計①
30	牛尾陽子、他	2016	短期大学看護学科 3年生 7名	フォーカス・ グループ・ インタビュー	事前学習シートの活用状況から【必要知識を収集・整理する】【合併症を経時的に理解し予測する】【術後の経時的変化を認識する】【一般回復過程を個別性に理解する】など 7 カテゴリーが抽出され、知識の整理、事象の多さ、「術が早くつらい実習」「教員の詳細」であることが抽出された。教員はストレスになる刺激の適正化を図るとともに、学生の対応能力が効果的に発揮できるように支援している必要が考えられた。	教授方略⑩
31	服部由佳、他	2016	看護専門学校 3年生 121名	質問紙調査	アセスメント内容分析の結果、術前は「呼吸機能検査結果」「既往歴」など 5 つ、術中は「全身麻酔・気管挿管による気道内分泌物の増加」など 6 つの影響因子が抽出され、看護援助は「気道内分泌物の排出への援助」「術後の呼吸状態の観察」など 8 つが抽出された。	学生理解⑦
32	佐野なつめ	2016	看護専門学校 2年生 11名	実習記録の分析	術後せん妄患者を受け持った学生の学習過程を明らかにする	学生理解⑧
33	尾藤有利子、他	2017	大学看護学専攻 4年生質問紙 28名、 面接 2名	質問紙調査 半構成的面接	術後せん妄患者を受け持った学生の学習過程を明らかにする	学生理解⑨
34	中村眞理子、他	2017	看護大学 3年生 110名	実習レポートの 単語頻度分析 クラスタ分析	術後せん妄患者の終了後レポートから学生が学んだ内容を明らかにする	学生理解⑩
35	薄井嘉子、他	2017	看護大学 3年生 110名	実習レポートの 内容分析	周手術期実習の終了後レポートから学生の看護実践能力の習得状況を明らかにする	学生理解⑪
36	大滝周、他	2017	手術室実習指導 看護師 34名	質問紙調査	手術室見学実習記録用紙を用いた実習指導の状況、効果を明らかにする	教授方略⑫
37	大滝周、他	2017	大学看護学科 104名	質問紙調査	周手術期実習における学習ファイルの活用状況を明らかにする	教授方略⑬
38	石渡智恵美、他	2018	短期大学看護学科 3年生 54名	実習レポートの 内容分析	ICU・HCU 実習の学びが学生のケアや看護観に与えた影響を明らかにする	授業設計②

## 2. 対象者、対象者数

研究の対象者は、文献29件のうち、看護学生が26件、臨床指導看護師が2件、看護学生と臨床指導看護師が1件であった。看護学生26件の所属教育機関は、大学が10件、短期大学が9件、専門学校が7件であった(表1)。

## 3. 調査方法

研究の調査方法は、質問紙調査が11件、実習記録・実習レポートなどの内容の分析が11件、半構成的面接、質問紙調査と半構成的面接の組み合わせがそれぞれ2件、フォーカス・グループ・インタビュー、演習レポートと質問紙調査の組み合わせ、STAI調査と唾液中物質測定との組み合わせがそれぞれ1件であった(表1)。

## 4. 対象文献における研究細目分類の結果およびその内容

対象文献29件を、研究細目で分類すると(表1)、「教授方略」が12件、「学生理解」が11件、「看護技術教育」が4件、「授業設計」が2件で、11分類のうち4分類がみられた。研究細目別で文献数の経時的变化をみると(図1)、2001年から2006年の7件では「教授方略」「学生理解」「看護技術教育」がそれぞれ2~3件であり、2007年から2012年の10件では「教授方略」が6件で最も多く、「学生理解」と「看護技術教育」はそれぞれ2件であった。2013年~2018年の12件では、「学生理解」が6件で最も多く、「教授方略」が4件であり、「看護技術教育」はみられなかったが、新たに「授業設計」の2件がみられた。研究細目分類ごとの調査結果は次のとおりである。

### 1) 「教授方略」

「教授方略」に関する文献は12件であり、2002年から2017年にかけて、ほぼ毎年1件が継続的に発表されている。調査結果の内容をみると、2007年までは、カンファレンスの効果(No.10)、指導者から求められる知識・技術の内容(No.17)など、実習での学習内容に関するテーマが多かったが、2009年以降は、手術室実習を見学から学生参画型に変更した成果(No.19)、シャドーイングを取り入れた成果(No.27)など、指導方法の工夫に関するテーマが増え、2010年からは、事前学習の成果(No.23,30)、学内学習の成果(No.37)など、臨床現場以外で行う学習方法に関するテーマがみられ、事前学習、事後学習との融合学習の検討が行わ

れはじめた。

### 2) 「学生理解」

「学生理解」に関する文献は11件であり、2002年から2012年にかけて、2年~3年に1件の割合で発行されていたが、2016年~2017年の2年間では5件が連続して発行された。研究テーマをみると、2011年までは学生の実習に対するイメージ(No.11,13)、不安(No.14)、達成感(No.26)など、学生の心理的なテーマが多かったが、2016年~2017年では、実習における学生の学習内容の確認に関するテーマが多くみられた(No.32,33,34,35)。

### 3) 「看護技術教育」

「看護技術教育」に関する文献は4件であり、2005年~2009年に留まっている。看護技術の項目は、筋肉内注射(No.15)、包帯交換(No.16)、術後観察(No.20)であり、2009年の研究では(No.21)、看護技術の全般に至り、実習での実施率が低いことを報告している。

### 4) 「授業設計」

「授業設計」に関する文献は2件であり、2015年、2018年でそれぞれ1件であった。研究テーマは、ICU・HCU実習の有無と看護実践力の関連(No.29)、ICU・HCU実習と看護観への影響の関連(No.38)であった。No.29の研究では、看護実践力の向上をねらいとして、ICU・HCU実習(半日)を受け持ち患者の実習とは別の実習として行っていた。

## V. 考察

### 1. 周手術期実習に関する研究論文数の動向

周手術期実習をテーマとした研究は、2002年から発行され、漸次増加傾向にあった。研究論文数の動向を、研究細目分類別による文献数の経時的变化でみると(図1)、2007年から2012年では「教授方略」が多かったが、2013年以降では「学生理解」が最も多くなり、また、新たに「授業設計」をテーマとした研究への取り組みがみられはじめた。近年、医療の進歩に伴い、手術を受ける患者の在院日数が短縮化し、従来の対象別・場所別の枠組みでの実習を効果的に行うことが困難になってきている。加えて、周手術期実習は術後の生体侵襲の理解の難しさや看護展開が速く、学生はストレス状態が高まり、看護援助への参加に躊躇して、実習に満足感や達成

感が得られにくいといった報告がある<sup>39) 40) 41)</sup>。今回、研究細目分類の経時的変化の結果から、実習の構成を検討する「授業設計」がみられはじめたこと、学生の学習成果を確認する「学生理解」が増えていることが捉えられた。臨床現場の変化が周手術期実習に及ぼしている影響を実証的に表したものと示唆される。2015年、厚生労働省は2025年時点の病床数を現在よりも16万～20万床減らし、在宅や介護施設へ治療を切り替える目標をあげている<sup>42)</sup>。在院期間の短縮化は、今後ますます加速し、周手術期実習の運営、学生の学習状況への影響が大きくなることが予測される。周手術期実習にとって臨床現場の現状に即した実習プログラムの検討が喫緊の課題になっている。

## 2. 研究細目分類で明らかとなった研究論文テーマの時系列変化からの示唆

### 1) 「教授方略」

「教授方略」に関する文献12件の調査結果（要約、抜粋）をみると、2007年までは実習プロセスを展開する上での教授内容に関するテーマが多かったが、2009年からは実習プロセスに加味される教授方法の工夫に関するテーマがみられはじめた。また、2010年以降は、事前学習、事後学習の成果など、臨床現場以外で行われる学習内容をテーマにした、実習と事前、事後の学内学習の連動を重視する融合学習の検討が主要な研究になっていた。周手術期実習では、手術操作による患者の急激な変化への対応が看護の特徴であり、学生にとっては術後の患者の状態と看護の実際のイメージが難しい。事前学習は、手術直後の患者のイメージ化と、周手術期実習で求められる看護実践に向けて何をどのレベルまで学習する必要があるのかを実感する機会であり、実習の準備教育として重要であると考えられる。また、近年の少子化に伴い、高等教育への入学希望者が全員入学してくる現状から、入学者間の学力格差が生じている現代的学力の問題があり、大学レベルの教育を受けるためには、十分な準備教育を行わなければ教育の質を保つことが難しい状況にあることが報告されている<sup>43)</sup>。臨地実習の実施にあたって、実習における教育の質を保つためには、直前の準備教育の充実がますます重要になることが示唆される。

一方、事前学習が調べる学習にとどまり看護実践につながる具体的な学習になっていないことが危惧される。事前学習として、学習課題を記録にま

とめる課題は、学生によって学習量や学習内容の具体性に差が生じてしまうという指摘がある<sup>37)</sup>。記録に知識を書き留めるだけでなく、自分なりの思考を整理することを目的として、知識と臨床現場の照合を想定する、予測される事象の意味を考えながら知識を理解することを促すために、事例を提示するなどの実践的な教授方略が求められる。関連して、e-learning<sup>44)</sup>、シミュレーション学習<sup>45)</sup>、事前学習の演習発表<sup>23)</sup>など、実習前に看護の実際のイメージ化を促進する教授方略が試され始めている。実習の事前学習は、学生にとって必要に迫られた時期の学習であり、講義による知識、技術の基本的な学習に重ねた、有機的な効果が期待される。臨床現場の実際に役立つような学習環境、効果的教材を提供し、学習時間を確保することで学生の学習意欲、および学習効果が上がることが示唆される。

### 2) 「学生理解」

「学生理解」に関する文献11件は、2002年から2年～3年に1件の割合で発行された。2016年～2017年の2年間では連続して5件が発行され、学生がどのような学習内容にあるのか、またどのような学習成果をもたらしたのかなど、学生の達成度を確認するテーマが多かった。周手術期実習の特徴の一つには、術前・術直後・術後、そして退院へと、看護の展開が速いこともあげられる。低侵襲手術の増加に伴い、さらにその状況が一般化してきている。学生は知識と技術の未熟さから、展開の速さへの対応が難しく、不安や緊張を抱きやすい<sup>13)</sup>。また、手術を受ける患者は、疼痛や不安、ボディイメージの混乱、社会的役割の変更など心身共に不安定な危機状況にあり、看護者へのニーズが高い<sup>28)</sup>。学生にとって、身体の変化のみならず、急激な心理的变化への対応が求められ、難しいケアになり、今後さらに高いストレスを感じやすい状況になることが考えられる。

Lazarusら<sup>46)</sup>は、ストレスフルな環境にあっても個人の資源が豊かであれば、その状況を解決できる対処行動をとることができ、環境適応できるとしている<sup>31)</sup>。つまり、状況を適切にとらえてその状況にある自分をコントロールできているという感覚を持つことで精神的安定を保つことが可能になるとしている。手術から退院へと展開の速い周手術期実習にあって、事前学習での臨床現場のイメージ化をはかること、実習中では学生の考え・感情を表現す

る機会をもてるように教員・実習指導者が関わること、もしくはカンファレンスを活用することなどの有用性が考えられる。また、実習終了後であっても、看護実践の経験を振り返る機会が学生のストレス緩和に重要であるとの報告がある<sup>35)</sup>。実習後の振り返りによって、学生が自分の体験を意味づけし、失敗体験であっても、今後への経験として肯定的に捉えられるようになり、学生自身の成長につながると考えられる<sup>47) 48)</sup>。

### 3) 「看護技術教育」

「看護技術教育」に関する文献は4件で、2009年以降はみられていない。看護技術の全般にわたって実習現場での実施率が低いことが報告されている。学生が実施を積み上げていくために、卒業時到達度の学生への意識づけ、領域間での実施状況の共有、学生への働きかけ、実習後補習学習などがあげられる<sup>21)</sup>。また、学生の看護技術を実践する際の傾向として、患者の状態観察が局所的なものにとどまり、患者の全体への関心、配慮にいたらないことが指摘されている。例えば、ドレーンやドレーン挿入部は観察するが、患者の全身状態や、創部が体のどこの部位であったかが抜けがちにあることなどである<sup>16)</sup>。学生としては、過度の緊張状態、援助の実際をイメージできない、場になじむことで精いっぱいであることなどが原因として考えられる。一方、周手術期実習においては、学生の受け持った患者によって差が大きいことも報告されている<sup>21)</sup>。受け持ち患者が術前か術後かによる差、診療科による差など、変動の大きい周手術期実習の臨床現場で学習することの限界が考えられる。短期間の学習機会を効果的に活用するためには、まずは、事前学習を行い、知識、手順を看護場面の一連の流れをもって繰り返し練習すること、イメージトレーニングを行いイメージ化して臨むことなど、緊張感がある中でも学生が落ち着いて看護場面に臨めるような学習の有用性が考えられる。さらに、他学生の受け持ち患者を通して看護を共有する、カンファレンスは学生が学びたいと考えるテーマに調整するなど、看護技術を学ぶ機会を、学生個人の体験以外へ拡大していく方法を検討することが必要であると考えられる。

### 4) 「授業設計」

「授業設計」に関する文献は2015年と2018年の2件であった。研究テーマは、ICU・HCU実習の成果であり、看護実践力向上をねらいとして、受け持ち

患者の実習とは別の実習として行った報告がみられた。杉森ら<sup>49)</sup>は、看護学教育における授業設計について「看護に関して白紙の状態である学生が学内の授業を通して看護学の知識や技術を習得し、それを実際のクライアントに展開するところまでを目標とする」と述べている。看護実践能力の育成には、看護学の知識や技術の習得だけでなく、それらを一かに臨床現場の患者や家族に対して実際に提供できるかが重要であると示されている。先行研究では、一般病棟での患者の在院機関の短縮化にあることから、ICU・HCU実習へと実習の場を拡大し、看護実践力向上をはかる授業設計の成果が報告されていた。臨床現場の変動に柔軟に対応していく授業設計は、今後さらに求められていくものと考えられる。そのためには、学生の卒業時の達成目標を見定め、また、学生自身が臨床現場の変動に対応できるように、実習ごとで学習目標を学習者中心で学生と共に考え、言語化して具体的に示し、学生自身でも何をすればよいのか、臨床現場の状況に応じて自分で考え行動できるような授業設計が重要になることが考えられる。2019年厚生労働省『看護基礎教育検討会報告書』<sup>7)</sup>では、領域横断の考え方に基づく実習の実現化が大きな変革点として示された。周手術期実習では、成人期・老年期が対象となり、その時の対象にあわせた多角的な看護の実践が求められている。メリットとして臨床現場の看護の捉え方に沿った教育実践になり、学生の看護実践力が向上することが考えられる。一方、課題として教員のスキルアップとともに、学生の主体的な学習能力の向上、さらにより密な臨床現場との調整が求められると考えられる。

### 5) その他の研究細目

今回、「教育評価」「倫理教育」「医療安全教育」「カリキュラム」「教育プログラム」「教員の資質・能力」「キャリア開発」の7分類はみられなかった。2019年厚生労働省『看護基礎教育検討会報告書』における「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」<sup>7)</sup>の発表にあわせ、「カリキュラム」「教育プログラム」などの研究がすすめられ、周手術期実習でも、さまざまに検討されていくものと考えられる。本研究における対象文献の中でも、周手術期実習の前に慢性期実習を行うなど、学生の学習段階を考慮し、科目を横断するような教育プログラムがみられた<sup>20)</sup>。学生が、より効果的な学習

を進めるために、今後は、さらに教育機関と実習施設、教員と実習指導者の連携など、「カリキュラム」「教育プログラム」「教員の資質・能力」にわたった研究が求められていくものと考えられる。

## VI. 結論

対象文献は29件で、対象者は看護学生26件、臨床指導看護師2件、その他1件であった。研究細目で分類すると、「教授方略」12件、「学生理解」11件、「看護技術教育」4件、「授業設計」2件であり、2015年以降「学生理解」が最も多く、新たに「授業設計」がみられはじめた。患者の在院日数が短縮化する周手術期実習の現状に対応することが課題であるが、看護を具体的にイメージして実習に臨む事前学習の有効性が「教授方略」「学生理解」

「看護技術教育」の多側面から裏づけられた。また、事前学習は学生間の学力格差という現代的学力の課題への対応として重要であることが示唆された。今後、「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」<sup>7)</sup>の発表にあわせ、「授業設計」、ならびに「カリキュラム」「教育プログラム」などの研究がすすめられていくものと考えられる。

利益相反：本研究における利益相反は存在しない。

著者資格：KTは研究の着想・データ収集・分析・解釈をし、原稿を作成した。YU、KH、KIは、研究の着想・分析・解釈に貢献し、最終原稿について確認した。

## 引用文献

- 1) 雄西智恵美, 佐藤禮子, 井上智子. 臨床実習における学生のストレスと学習効果. 日本看護学教育学会誌. Vol.2, No.2, 1992, p.50-51.
- 2) 足立佳世, 中本久美子, 尾崎フサコ子. 手術患者を受け持つ学生の実習展開と不安. 大阪看護短期大学紀要. Vol.16, 1994, p.81-84.
- 3) 沖野良枝, 岸友里, 池本静香, 地石孝子, 他. 周手術期実習における学生のストレス評価の分析 (第2報) 周手術期経過に対応したストレス, 不安評価の時系列変化. 日本精神保健社会学会年報. Vol.7, 2001, p.36-44.
- 4) 明石佳子. 急性期(周手術期)看護学実習“困難”をどう乗り越えるか. 看護展望. Vol.26, 2001, p.1201-1206.
- 5) 田中初枝, 三ツ井圭子, 眞鍋知子. 成人看護学実習における学生の学びと看護実践能力の関連. 了徳寺大学研究紀要. No.12, 2018, p.105-115.
- 6) 厚生労働省. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書. 2011.  
<<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001316y-att/2r985200000131bh.pdf>>, (参照2019-8-26)
- 7) 厚生労働省. 『看護基礎教育検討会報告書』. 2019.  
<<https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf>>, (参照2019-10-17).
- 8) 大木秀一. 看護研究・看護実践の質を高める文献レビューのきほん. 医歯薬出版株式会社. 2013.
- 9) 日本看護学教育学会. “第29回学術集会 一般演題募集演題分類”.  
<<http://www.procomu.jp/jane2019/index.html>>, (参照2019-8-26).
- 10) 猪俣祥子, 伊藤登茂子, 煙山晶子. 周手術期実習におけるカンファレンスと習得度の関連. 秋田県看護教育研究会誌. No.27, 2002, p.2-6.
- 11) 北川さなえ. 周手術期実習における看護学生のイメージ 高校卒業の学生と一般大学(短大)卒業及び就職経験のある学生との比較より. 東京厚生年金看護専門学校紀要. Vol.5, No.1, 2003, p.14-16.
- 12) 桑子嘉美. 学生の課題レポートを用いた成人周手術期実習の教授活動に関する検討. 順天堂医療短期大学紀要. Vol.14, 2003, p.180-186.
- 13) 吉井美穂, 八塚美樹, 安田智美, 他. 周手術期実習における学生の手術に対するイメージの変化. 富山医科薬科大学看護学会誌. Vol.5, No.2, 2004, p.103-107.
- 14) 沖野良枝, 山口曜子, 岸友里, 他. 周手術期実習中の看護援助における学生のストレス認知と生理的反応との関連 唾液中クロモグラニンA (CgA), コルチゾールによる検討. 人間看護学研究. No.2, 2005, p.79-87.



- 15) 加藤千恵子, 鈴木夕岐子, 浅見多紀, 他. 成人看護実習における筋肉内注射実施に対する学生の自己評価. 日本看護学会論文集:看護教育. Vol.No.35,2005,p.133-135.
- 16) 阪井幸恵, 齋藤美和, 森木妙子, 他. 看護系大学生が捉えた手術後患者包帯交換場面における観察結果, 看護・保健科学研究誌. Vol.6, No.3, 2006, p.35-41.
- 17) 森一恵, 小関真紀, 小西美和子, 他. 新人看護師が求めている看護基礎教育における周手術期の学習内容. 大阪府立大学看護学部紀要. Vol.13, No.1, 2007, p.33-41.
- 18) 杉山恵子, 近藤奈諸子. 周手術期実習における経験と学びを支える要素 - 患者の状態をとらえて看護援助で来た場面から -. 日本看護学会論文集:看護教育.No.38,2008.21-23.
- 19) 原元子. 学生の参画型実習における周手術期実習での学び. 共創福祉. Vol.4, No.2, 2009, p.39-47.
- 20) 佐野なつめ. 周手術期実習における学生の観察状況 手術後3日間の看護実習記録の分析. 東京厚生年金看護専門学校紀要. Vol.11, No.1, 2009, p.46-50.
- 21) 原田真里子, 新田純子, 長内志津子, 他. 成人看護臨床実習における看護技術の実施・習得状況および今後の課題 慢性期・周手術期の特徴の明確化と学内演習の充実に向けて. 弘前学院大学看護紀要. Vol.4, 2009, p.11-24.
- 22) 山本多香子. 周手術期実習におけるアロマテラピーを取り入れる効果. 京都市立看護短期大学紀要.No.35,2010,p.95-100.
- 23) 山本多香子, 田村葉子, 山田豊子. 周手術期実習前における事前学習の検討. 京都市立看護短期大学紀要.No.35,2010,p.83-88.
- 24) 佐野なつめ. 周手術期実習における「健康知覚 - 健康管理」パターンの情報収集の現状 癌の手術を受ける対象を受け持った学生の記録からの分析. 東京厚生年金看護専門学校紀要. Vol.13, No.1, 2011, p.33-39.
- 25) 山本多香子, 田村葉子, 中島優子, 他. 退院指導パンフレット作成による学び 学内演習後レポートと臨地実習終了後アンケートの検討. 日本看護学会論文集:看護教育. Vol.No.41, 2011, p.264-267.
- 26) 水谷郷美, 城丸瑞恵. 手術室実習における学生・実習指導看護師の達成感に関連する要因. 日本手術看護学会誌. Vol.7, No.1, 2011, p.10-14.
- 27) 長田艶子. 周手術期実習におけるシャドーイングの実態調査 学生アンケートによる検討. 日本看護学教育学会誌. Vol.23, No.1, 2013, p.53-61.
- 28) 廣松美和. 周手術期実習における看護学生と患者の援助関係の形成要因. 日本看護研究学会雑誌. Vol.36, No.4, 2013, p.75-85.
- 29) 菱刈美和子, 石渡智恵美, 菊地きよ美. 周手術期実習における看護実践力の向上を目指した育成方法の検討 ICU・HCU看護実習を体験した学生の看護実践能力の獲得状況と看護技術, 学びの分析より. 日本看護学会論文集:急性期看護.No.45,2015,p.333-336.
- 30) 牛尾陽子, 中村滋子, 小濱優子, 他. 周手術期実習において看護学生が事前学習シートを活用することと有用性 学生に対するフォーカス・グループ・インタビューの分析から. 川崎市立看護短期大学紀要. Vol.21, No.1, 2016, p.1-12.
- 31) 服部由佳, 木幡光子, 磯和勅子. 周手術期実習中における看護学生のストレス反応と情動知能の関連. 日本看護研究学会雑誌. Vol.39, No.5, 2016, p.75-83.
- 32) 佐野なつめ. 初めての周手術期実習における学生の呼吸系アセスメントの影響因子と看護の捉え方の実態. JCHO東京新宿メディカルセンター附属看護専門学校紀要. Vol.2, No.1, 2016, p.16-21.
- 33) 尾藤有利子, 倉田雅子, 福岡葵, 他. 周手術期実習における術後せん妄に対する看護学生の学習意欲の変化. 看護展望. Vol.42, No.14, 2017, p.1350-1358.
- 34) 中村真理子, 薄井嘉子, 鈴鹿綾子, 他. 成人看護学急性期実習において学生が学んだと認識した看護の内容グループの振り返りレポートから. 日本看護学会論文集:看護教育.No.47,2017,p.95-98.
- 35) 薄井嘉子, 中村真理子, 鈴鹿綾子, 他. 急性期実習における看護実践能力の習得状況 実習グループのレポート分析から. 日本看護学会論文集:看護教育.No.47,2017,p.91-94.

- 36) 大滝周,大木友美,加藤祥子.看護学生が手術室見学実習を意図的に望むための教育的試み(第2報)手術室看護師が感じた手術室見学実習記録用紙を用いた指導の効果.昭和学生会誌.Vol.77, No.4, 2017, p.423-433.
- 37) 大滝周,大木友美.学内〈大学〉での学びを〈臨床〉に繋げる成人看護学教育プログラムの開発(第1報)周手術期実習における学習ファイルの活用状況.ヘルスサイエンス研究.Vol.21, No.1, 2017, p.25-31.
- 38) 石渡智恵美,菱刈美和子.周手術期実習におけるICU・HCU看護実習を体験した学生の学びと看護観に関する研究.帝京科学大学紀要.Vol.14, 2018, p.111-116.
- 39) 荒木玲子,蘇原孝枝.急性期実習における学生たちの達成感について 実習終了後のアンケート結果から.足利短期大学紀要.Vol.26, No.1, 2006, p.33-36.
- 40) 橋本茂子,黒田裕美.周手術期看護実習の体験を通して学生が振り返った学びの検討.日本看護教育学会誌.Vol.24, No.2, 2014, p.49-55.
- 41) 佐藤美紀子,森山美香,矢田昭子,他.成人看護学実習(急性期)における看護学生の成功体験.島根大学医学部紀要.Vol.35, 2012, p.39-46.
- 42) 厚生労働省.第4回地域医療構想に関するWG資料3.2017.  
(<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000164337.pdf>),  
(参照2019-10-17).
- 43) 橋本はる美,堀井千夏.教育・学習モデルに基づいた事後学習のための教育支援手法.経営情報研究.Vol.21, No.2, 2014, p.1-13.
- 44) 山下奈緒子,福田里砂,山脇孝,他.e-learningを活用した周手術期実習の事前学習教材の開発「周手術期看護:手術直後の患者の観察と対処方法」における取り組み.大学教育実践ジャーナル.No.15, 2017, p.81-88.
- 45) 山内栄子,西園貞子,林優子.看護基礎教育における臨床判断力育成をめざした周手術期のシナリオ型シミュレーション演習の効果の検討.大阪医科大学看護研究雑誌.Vol.5, 2015, p.76-86.
- 46) Lazarus, R. S., Folkman, S.. 本明寛, 春木豊, 小田正美監訳. ストレスの心理学 認知的評価と対処の研究. 初版. 実務教育出版. 1984, 401p.
- 47) 金子直美, 中島正世, 澤田和美, 他. 看護学生の情動知能の状況(第1報). 日本看護学会論文集(看護教育). Vol.41, 2010, p.217-220.
- 48) 内山喜久雄, 島井哲志, 宇津木成介, 他. EQSマニュアル. 初版. 実務教育出版. p.2-49.
- 49) 杉森みど里, 舟島なをみ. 看護教育学第5版増補版. 医学書院. 2015, p.56.